神樂催馬樂通解

完

911.63
力

今井鯉山著

神樂催馬樂通解

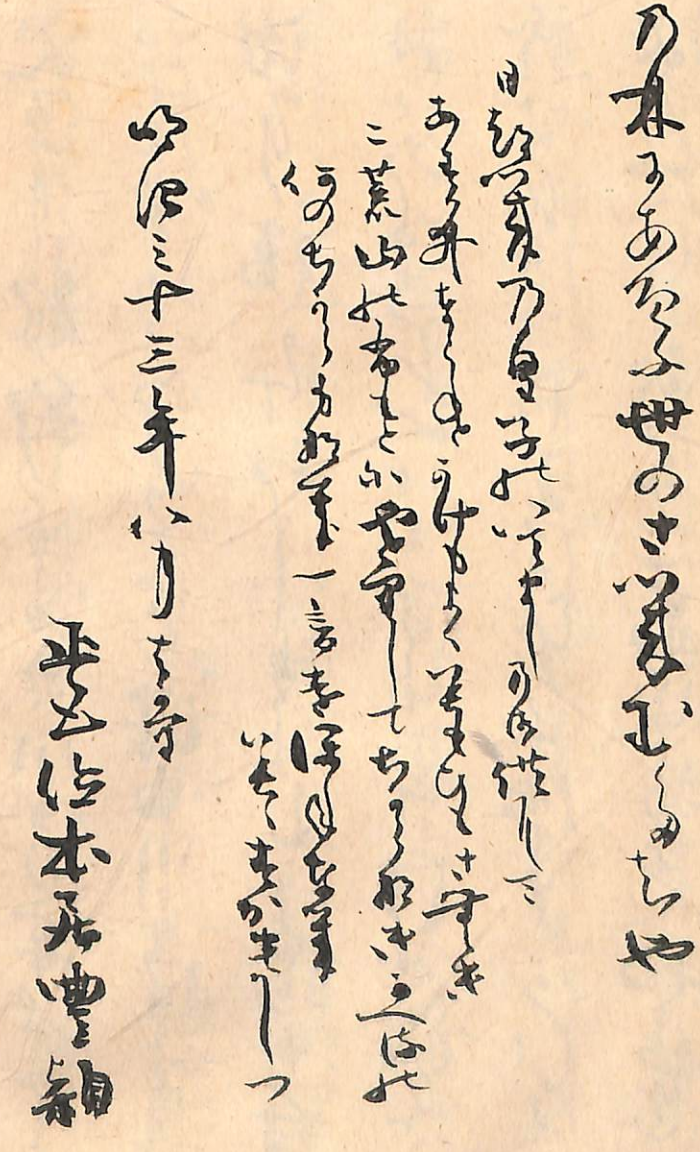
完

東京　古今文會

[illegible]

けふなまもちまじきてとかなしきのゝ視識乃
意味中にも宮にも家乃小深むしき
希しくこゑまては新しき文のくく人に無
ことなし文一ヶ條ありく尽るへき書能里
之井如しのそふみにも名せはしく諸道解
華のかくり女らきつくすなりぬきてし望

尺ありし解釈のつかも川口乃余楽あり
この筆ちらそうかくひとく深田川あさ筆
識可り橋みわしきしむこともち手
まさとなはきあへとおかるちて清き満き
手米ゆきては玉ものみ偲しうしも
みろふへし紹介まあひるあまへ也と紫



目次

一 神樂催馬樂通解の引……一頁
二 神樂催馬樂の由來……四頁
三 神樂催馬樂名義の一……十二頁
四 神樂催馬樂名義の二……十六頁
五 神樂催馬樂名義の三……十八頁
六 異本……二十八頁
七 注釋もの及參考すべきもの……二十九頁
八 神樂……三十一頁
庭燎……同
阿知女作法……同

採物……三十二頁
賢木　幣　杖　篠　弓
劔　鉾　杓　片折　諸擧
韓神
大前張……四十二頁
宮人　木綿志天　難波潟　前張　階香取井奈野脇母古
小前張……四十七頁
薦枕　閑野　磯等　篠波　殖槻
總角　大宮　湊田　蚕　千歳
早歌
明星……五十八頁
吉々利々　得錢子　木綿作
雜歌……六十一頁

畫目　弓立　朝倉　其駒　竈殿
酒殿
九催馬樂……六十九頁
律……同
我駒　澤田川　高砂　夏引　貫河
東屋　走井　飛鳥井　青柳　伊勢海
庭生　我門爾　我門乎　大路　大芹
淺水　挿櫛　鷹子　逢路　道口
更衣　何爲　鷄鳴　老鼠　隱名
呂……八十七頁
安名尊　新年　梅枝　櫻人　葦垣
眞金吹　紀伊國　葛城　竹川　河口
此殿者　此殿西　此殿奥　鷹山　美作

藤生野　妹與我　淺緑　青馬　妹之門
席田　大宮　總角　本滋　蓑山
眉止自女　酒飲　田中井戸　難波海　鈴之川
石川　奥山　奥々山　我家

神樂催馬樂通解

今井鰮山著

第一章神樂催馬樂通解の引

我國民思想の程度、及び感情の標準の如何なりしかを、其の時代に應して知るは、極めて必用の事なるべし。これを知りぬべき文學我れになしといふか、いさや、無きにあらざるなり。

我國上代文字なし、文字を用ひしは專ら奈良朝以來のことあり。文字あき世にい文學なしといふか、いさや、無きにあらざるなり。

文字ありて以來は、西大陸の文華を引きて、上下その俗を變するに至り、然る以後の精神界は、然る以前の精神界と一樣ならず、此れに易ふるに彼れを以てせりとまでは有らじとも、彼此混同してひたすら大和民族のものならざるは言ふまでもなからむ。故に文字なき以前の精神界は西大陸の風氣に感化をうけざりしなり、文字ある後の精神界は西大陸の風氣に感

化をうけたりしなりといふを得べし。その感化以後の思想と感情とは、漢籍を假り、佛典を假りて研鑽餘蘊なし、而してその感化以前の思想と感情とは措いて問はずは、蓋し本末を顚せし譏なからんや。それとも、我等祖先の舊思想舊感情を知るに價なしといふか、此は亦過れるの甚しきもの。文字なしといふとも、談話はありしなり、文字なしといふとも、歌謠はありしなり。その談話、その歌謠、優に上代の思想感情を解說するに足り、且つその談話に、歌謠に、文飾あり、姿態あらば、これを文學以外に放棄しつべきか。まして此を麗しき文字にさへ寫し止めたらむをば、いかにぞ我國上代に文學なしといふべき。

古事記祝詞は上代の人の談話を書きとめしものなり、しかも、其の感化以外の思想なるなり、感情なるなり。神樂催馬樂は上代の人の謳へる俗歌なり、しかも、其の感化以外のもの少なからざるなり。感化以外のものなれば、まさしく我大和民族の眞思想眞感情を知るに足るものなるなり。古事記祝詞は尊ふべきもの、これに次きては、此の書の尊ふべきものなるは、何に

ぞおのれの言を待たむ。

さるを、輓今古事記祝詞に心をよせて、上代文學を研究せん人はあらむも、此の神樂催馬樂に力を及ぼす人の少きやうなるは、いかなる理なるべき。あるひは短篇零冊取るに足るものなしといふか、取るべきものあるも他の學術にいそがはしく、これに餘力を假す遑なしといふか、そも〳〵全力を注くも、その趣味を會得する能はずといふか、いとも〳〵訝しき限りなり。

世人、もし上代國民の精神界を研究せんとせば、必ずこの歌集に一顧の勞を賜へ、短篇零冊なりとて棄て給ふこと勿れ。況んや、此等の歌、古の樂府にして雅正なるもの、詩形の變化自在なるは取りて以て方今の文學に裨補するもの少なかるまじきに於てをや。

たのれ神樂催馬樂を讀みて得る所固より少し。されども、おのれよりも猶少き人も世にはなどか無からん。もとより遼東の豚たるそしりは心に期するところなれど、萬が一に献芹の誠を諒せしめ給ふ人もなかるべしや

はとて、かくは通解を出すにいたれりしなり。

通解は先つ神樂催馬樂の由來を說き、その根源を明らかにし、次きに三章に分ちてその名義を細論せり。文學上發揮するところ少なかるべしといへども、初學者の爲め必しも小益なしとはいはじ。本文は特に詳解を要すべきものゝ外は、小注を加ふるに止め、通例に用ふる言詞の如きは措いて解說せず。そは煩しき注釋より迷はさるゝことなく、直に本地の面目に接着せしめんが爲めなり。おのれ通解を作れりし時に用ひし注意の大概れよそかくの如し。

第一章　神樂催馬樂の由來

大方、神樂のおこりは天照大神の天の岩戸をさして籠り給ひし時、諸神の祈り申されたるに天鈿女の命まさきのかつらを鬘とし、日蔭を手すきにして舞ひ奏で、庭火をたきし往昔より始ることなれば、我朝の風俗、神代の緣起、他に異るべきにやとあるは、公事根源の文なり。これぞ神樂の始めなるは疑ふべきにあらず、日本紀古事記にもそのさま細しく書きあらはし、舊事紀に

鎭魂祭日者、猿女君等率百歌女、擧其本而神樂歌儛、尤是其緣者矣、

とあり、又、古語拾遺に

中臣齋部二氏、俱掌祠祀之職、猿女君氏供神樂之事、自餘各有其職

とあり、猿女君といふは天鈿女命の苗裔なり。此によりて考ふるに、神樂は神代の始めより、神の御心を穩め慰め奉る具として世々行れたりしものなるなり。

故を以て、神樂を本邦樂曲の一種とし、殊にこれを尊重せられたるはいふ迄もなき事ながら、今の如き神樂歌ありしとも見えず、古語拾遺の文にて察するに、アナ面白アナサヤケオケと拍子辭を唱へてうちはやしたるさま、殆と唐高麗樂の舞の手と唱歌の拍子とのみありて、その歌詞なきに同しさまなりしなるべし。今ある神樂哥の拍子に、阿知女於介と唱ふるものその遺風と知られたり。

歌詞を舞曲に取り合せて歌ふは何時頃よりのことなりけむ。續日本紀元正天皇養老元年四月の條に

天皇御西朝。大隅薩摩二國隼人等奏風俗歌舞

とあり、同しく聖武天皇天平十四年正月の條に

天皇御大安殿、宴群臣、酒酣奏五節田舞、訖更令少年童女蹈歌云々、六位已下人奏琴歌

とあり、同しく光仁天皇天應元年十一月の條に

御大政官院、行大嘗會之事、以越前國爲由機、備前國爲須機云々、奏土風歌舞

とあるを見れば、此の頃よりなどや歌詞を舞に取り合せたりけん。今の神樂譜を見るに、本座末座を分てり。こは唐高麗樂の左方右方と分てるに由れるものと知られたり。舞樂の左右を分ちしわ、白石紺珠に、推古帝の時よりとし、和事始、又、樂解といふ書に、大神公持始て左方右方を分てりといふことと見えたり、大神公持は用明天皇頃の人なり、されど、その頃より神樂の

歌詞ありしにあらず、本末を分けて歌を謳ひしことの、物に確かに見ゆ始めたるは、聖武天皇天平六年二月の續日本紀に見ゆたるなどなるべし。猶、同書天平十五年五月の條、群臣を内裡に宴し、皇太子親ら五節を舞ひ給ひしことありて、橘諸兄勅を奉じ太上天皇に奏したる語のうちに、上下を齊へ和けて、動きなく靜かに在らせんには、禮と樂と二つ並てし平けく長くあるべしと、神ながらも思しまして、此の舞を始め賜ひきといふ語あるなど思ふに、我朝の歌舞の整へりしは果して此頃なること著し。又、或樂家記錄に、神樂催馬樂の家傳をあげ

淡海三船撰之、多氏へ相傳ふ

とあり、淡海三船は元正天皇養老六年に生れて、聖武天皇天平年間より桓武天皇延曆四年まで在りし人なれば、神樂催馬樂の此頃に音曲と舞曲とを取り合せたるものなること、いよ〳〵明らかなり。

されど、此の時代には二者を取り合せたるばかりにて、今ある神樂譜催馬樂譜の如きもの成りしにあらざるなり。

神樂といふ詞、並に催馬樂といふ詞は、續日本紀、三代實錄に見ゑそめたれど、今の如きものありしにはあらず。今あるものは、少し後れての世に出でたるなり、按ふに、古く風俗歌とて、士民一樣に謳へるものあり、その中より神を慰むるに採り用ひたるを神樂といひ、燕享其他の式の興を助くるものに用ひたるを催馬樂とはいひけん。さて催馬樂は催馬樂拍子に謳ひしものなるは明かなる事にて、神樂はいかに謳ひしものか知るべからず。大凡舞の手に合せて然るべきやう謳ひしものなるべく、上代は神樂は無調なり、近來都て壹越調になせりと躰源抄に見えたるにて、そのやうを知るべし。

その古く風俗歌ありといふは、古事記應神天皇の段に、吉野の國栖の歌をあげ、後の式ども吉野國栖御贄を献じ、歌笛を奏す、或は承明門の外にて風俗を奏すなどいふことあり。古事記に見えたる夷振、宮人曲、天田振、夷振之片下、續日本記に見えたる難波曲、倭部曲、淺茅原曲、廣瀨曲、八裳刺曲、などある皆この風俗の歌曲の名なり。さて悅目抄に

朝倉や木の丸殿の歌は、天智天皇のうたなるを、民共聞きとゞめて謳ひ始めけるなり。其れを國々の風俗ども撰定せられける時、延喜の神樂の歌にも加へられけるあり。其駒もその時加へられたりとぞ

とあり、朝倉其駒は今神樂歌中に收めたり、發夜抄に

大嘗會には、和歌所にいはひの歌をよみて奉りたるを、風俗所に下して、歌のふりをつけて、其歌の聲ぶりに隨て、悠紀主基の樂人樂を作りたるにて、左右舞人舞を作るべきとかや。

とあり、大嘗會に風俗を奏すること、遙か後なる世までもしかありき。此れらのさまは、寛永の頃、後水尾天皇の諸國に勅して、盆踊の歌を徵し給ひし如き類なりと見ゆ。此れによりて神樂歌は古くありし風俗歌中より採りしものなるを知るべく。猶、郢曲秘抄、風俗裏書に由れば

催馬樂、本路頭巷里之謠謌也、然而、後好事之士女、取以爲彈琴歌曲、其歌因來甚有古代、有中世、厥ノ后更奉諸國、謂之風俗、又後代謠謌謂之今樣、催馬樂風俗固是一也、遂翫之於宮中、

とありて、催馬樂も亦巷里の謠謌中より取りて、その拍子に合せたるを催馬樂といへりしを知るべし。

かくて、醍醐天皇の頃に至り、今の如き神樂催馬樂譜を定められ、一條天皇の頃に至り、神樂を以て內侍所恒例の祭具となされしことは、東遊譜に、延喜廿年十一月十日勅定云々、神樂譜に、延喜廿一年勅定也とあり、郢曲相承次第に

式部卿敦實親王、宇多天皇第八皇子、源家音曲之祖也、

とあり、催馬樂譜相承に

左大臣雅信公号一條、又号鷹司、音樂堪能一代之名匠也、催馬樂譜此大臣作之、是藤家之祖也、

とあり、一條左大臣は圓融花山兩帝の頃の人なり。奥義抄、袖中抄などに、催馬樂の譜は一條左大臣の時、律呂の歌も定められたりとあるをも考へ合するに、神樂も催馬樂も、凡延喜より寛和の間の頃に完成したるものなること疑なく、江次弟內侍所神樂の條に

自一條院御時始、十二月有御神樂、

とあり、公事根源にも一條帝の時より神樂始りしよし見ゆたるは、毎歳恒例として行ふ事になりしを知るべし。されば、神樂歌は奈良朝の頃に舞に合せて用ふるものとなり、延喜長保の頃に完成せしものなりしなり。催馬樂はそれに伴ひて世に出しもの、本は神樂と雙行し、後には單行するに至れるものなりしあり。

奈良平安の二朝は、詠歌の昌なりし時代なり。神樂催馬樂、その間に於て、別に一進路を取りしは、いかなる理由ならむ。萬葉の莊大なる、古今の優麗なる、共に千古の絶唱たり、詩形も亦整正なるものなり。當時の人、此の二集に飽かずして、又神樂催馬樂の詩形を迎へたるは、世態人情の變易とこそいへ、一は文字に寫す歌と化し、耳にきく哥にあらずして、目に見る哥となりしに、一は文字に寫す哥に化せず、目に見る哥にあらずして、耳にきく哥なりしに由るにあらざらむや。尙本篇名義の三に細しく論せり、參考すべし。」

一盛一衰は、何物も免れざるものならむ。かく神樂催馬樂の整頓せる前後、

物樣、古川、田歌、棹歌、今樣、朗詠などいふ唱物出て來て、朗詠も催馬樂と同し樣に燕享の具となり、後やには、採物のうち、榊、韓神の二曲、新嘗祭に幣を加へて三曲、大前張にて宮人、小前張にて薦枕、佐々浪、新嘗祭に閑野を加へて四曲ばかりを神樂に用ひ、大臣の儀式に催馬樂を知るものなく、全く朗詠を以てこれに代へたることあるに至れりといふ

第三章　神樂催馬樂名義の一

神樂はカミアソビと訓む說と、カグラと訓む說とあり、カミアソビと訓む說は、岡部眞淵翁の說なり、古今集に神遊の歌とあるに由る。遊といふ詞、古く鳥遊(神代紀)姫遊(崇神紀)國見遊ばし(萬葉)御碁遊ばし(拾遺集)などいふことありて、遊びといふ詞古くよりあり。もと神を祭りて神の心をなごむるものなれば、カミアソビといふ詞當れることなれど、カクラといふ詞も、日本後記、三代實錄などに康樂(カグラ)岡、神樂岡の地名見え、六帖の歌題にはカグラとあるを見れば、これも古くより用ひ習れたる詞なるなり。偖カグラは、カ

クレアヒの約にて、本末と分かれ、兩方より詞をかけ合するよりいふといふ本居大平翁の說あれど、いかゞあらむ、神に供ふる舞樂なれば、猶、字の如く神樂なるべし。岡部氏の神樂考、守部氏の入綾また伊勢氏の安齋隨筆にもその說あり、熊谷直好氏のは殊に詳細にて、神に供ふる樂なれば、カミクラ、カムラクなどいひけるが、加久良といひあらされたるなるべし、音訓交るゆゑ、いかゞと疑ふ人も有るべけれど、道樂(みちかぐら)、船樂(ふなかぐら)の類便りに任せていかにもいふ事に侍りといへり。

催馬樂はサイバラと訓む。神樂中に前張(さいばり)の名目あるによりて、此れもサイバリと訓むべしといふ說は誤りに似たり。サイバラは催馬樂の音讀なり。

躰源抄に、狛朝葛、新作續教訓抄を引きて、催馬樂といふは催馬樂といふ樂あり、それより事おこれりとあり。和名抄、雙調の部に、桃花苑、春庭樂、催馬樂(自注、律、我駒曲是也)狹鰭河(自注、律、澤田川曲是也)和風樂と並べ、皆唐樂也とあるを見れば、催馬樂はもと唐樂の樂曲なるを知るべし。これを唐樂の名

にあらずとして疑へる説もあれど、催馬樂の唐樂の名ありや否は姑くれき、同書、水調曲、拾翠樂、自注、律、有伊勢海曲是也とあり、啄木に、地久樂、自注、呂歌、有櫻人曲是也とありて。伊勢海、櫻人、皆催馬樂の哥なるに見れば、我が哥を唐樂の樂譜に合せて、種々に謳へるより起れる名なること必せり。樂家錄に、催馬樂拍子とて、その拍子圖をあげ、唐樂の如く五拍子ものなり、但的々これを擊つ、以て催馬樂拍子といふなりとあり。又以てその徵説とすべし。

我駒を催馬樂拍子に謳へることは、和名抄によりて知るべきに、此れを以て全編の總名とせしは、いかなる由ありけん。長瀨眞幸氏の説に、催馬樂といふ名は、其始に叙でたる吾駒の歌によれるなり、其の歌はいで吾駒とありて、始の二句馬を催す詞なるを以てなりといへるは、引據あるやうに似たれど、猶、足らはぬ心地す。按ふに、催馬樂拍子の外にもおほく用ひし樂律もあるべけれど、此の拍子は最も人の喜ぶ所とより、遂にその名を總ての上にはせしにもあるべく、又、我駒以外のものも、亦同しく此の拍子に謳

へるよりいふにもあらむ。郢曲抄、殘夜抄等見合すべし。

神樂中なる前張も、同しく催馬樂なるなり。その故は、古本神樂譜大前張の下に標記して、或曰催馬樂としるし、樂家錄に前張拍子とて、その拍子の擊方を説き、次に催馬樂拍子とて、その拍子の擊方を説きたる後に、堂上の説、前張拍子也とあり。郢曲相承には、只、拍子の少し換るのみといへれば、前張拍子も、催馬樂拍子も、少々の異同こそあれ、もと同しものなるを知るべし。されば、橘氏の入綾に論せし如く、大前張、小前張の十六首は、本催馬樂ながらも、毎時、神樂に謳ふゆゑに、神樂の譜の中に收めて一部とはなし來しならむ。又、次の催馬樂は右の神樂にはとり遺したれども、早くより郢曲の人のうたひ弄ぶ限りを集めて、又一部とはなし來しにこそ、もとより神樂催馬樂と上下になして、一部の書のごと傳へ來つるもさるやうこそあらめと言れたる、いと好き説なり。此を外にして、催馬樂名目の解種々あり。(一)諸國より貢物を大藏省へ納めし時、民の口すさびに謳ひけるものにて、馬を催すといふ説、(二)大前張の中なる初萩(はつはぎ)に衣はすらんといふ歌に由れりと

いふ説、(三)前張と催馬樂とは異なるものといふ説どもいつれも皆取らず。

第四章　神樂催馬樂名義の二

神樂は神を祭る時に用ひし舞樂なり。その神を祭るに用ひし次第は、加茂並に男山の神を祭る次第をしるせるもの、今も遺りて世にあれど、うるさければ畧きぬ。

時に、神祭ならでも用ひしこと、三代實錄仁和元年十月の條に見えたるもあれど、神樂はもと神を祭るに用ひしものなること疑ふべきにあらず。又神樂のうち謳ふのみにて舞のなきものもありき。されど、たしなべて必その舞の添はりたるものなりしなり。此れを恒例として內侍所の神樂となせりしは、一條天皇より後のことなること、既に第二章にいへり。

催馬樂は燕享に用ひし音樂なり。舞の手なし。朝覲行幸、御賀、立后、々宮女御々產、大饗、臨時客などに用ひたるもの、躰源抄に依りてあぐれば

此殿　朝覲行幸　立后　御賀
青柳　仝
席田　朝覲行幸　立后　御賀　后宮女御々產
安名尊　仝
伊勢海　仝
更衣　仝
本滋　朝覲行幸
新年　仝
眉止之女　朝覲行幸　御賀
美作　朝覲行幸　立后　御賀
庭生　朝覲行幸　后宮女御々產
櫻人　御賀
難波瀉　仝
大路　仝

鷹子　大饗
吾家　臨時客

あゞなり。この外の催馬樂哥も燕享の時用ひしものなるべけれど、記錄に遺らざれば今知り難し。

神樂中に收めたるものも、此等とおなしく、舞の手なく、徒謳なりしなるべし。

第五章　神樂催馬樂名義の三

神樂催馬樂二集の歌、合せて百二十三首を收めたり。（神樂は本末を合せて一首とせり）

神事に屬するもの廿二、人事に屬するもの三十、男女の愛、眷族の愛を謳ふもの廿八、天然の景物を謳ふもの廿四、その他滑稽人の頤を解くもの十八なり。すべて、後世勅撰集の歌と更に同しきものにあらず。

神事滑稽に屬するものは、重もに神樂の哥なり。殆その五分の一つゝなり。

愛情と景物とに屬するものは神樂催馬樂共にその數前者より稍多く、人

事に屬するものは重に催馬樂にして、その數最も多し。後世の歌は愛情を謳ふものならでは、景物を謳ふに限れるが如くなるに、此の集、人事を謳ふものゝ最も多きは、實に異數の事なりとす。これ神樂催馬樂の古代哥として注意すべき一なり。

神事を謳ふものに、人生をはかなみ、神力を仰くやうのもの一首もなく、笹の葉に雪ふりつもる冬の夜に、豐の遊びをするか樂しといひ、皇神の今朝の神あげにあふ人は、千歳の命延ぶとさくなど謳へり。悠々自適、士民の皇祖に事ふる樂しさを述べたる、穩雅、愉逸の態、見るに心地よし。十二組の早歌の如きに至りては、輕快、滑脫、口これを歌ひ、手これを舞ふさま、人をして噴飯絕倒せしむるに足るものあり。これ本邦神樂の本領にして、阿知女作法の緣由、此集の古代哥として注意すべきの二なり。

これを祝詞の崇高なるに比すれば、大にその姿態を減するなきにあらざるも、本、これ歌謳の躰然らざるを得ず。されども、なほ、幣、杖などの、みてぐらは我がにはあらず、天に在す豐岡姫の神のみてぐら、此杖はいづこの杖ぞ、

天に在す豊岡姫の宮の杖なりなどいふ莊麗の歌句なきにあらず。その足らざるは詩形これを補うてあまりあり。大方今の三十一字形の詩に、七字句一句を折り返し五七、五七七、又は五七七七七の句形なり。且つ神樂哥は一首を本とし、一首を末とし、二節組合せて一章を成せり。さらでだに、五七の句法は莊重に聞ゆるものなるに、猶、本末相唱和するやうに仕組し手段、いよ〳〵莊重の體を備へたりといふべし。

愛情を謳へるものにては、篠波、高砂の如き、最もおもしろきものなり。御稲つく女の麗しきをいひて、稲春蟹を取り合せたる、二人の可憐女を白玉椿玉柳に擬へ、心いそきのあやしかりつるを百合花の詞にていひあらはしたるなど、譬喩の用法妙といはざるべからず。篠波は二節より成り、高砂は七節より成る、高砂は九字句十一字句ありて、句法變化、眞に喜ぶべく、節の多き全篇を通して、これに過きたるはなし。其他玉ならば、畫は手にすゑ、よるは纏きねんと謳ひし如き、武生の里に我ありと、親には申したべ、心あひの風やとうたひし如き、長者の幼者を呢かしうし、人の子の我が親を床し

うしたるなど、敦厚の風、大に慕ふべく後世の戀歌などには終に見るべくもあらず。詩形も五七句の中に、テラニヤ、又はサキンダチャなどの拍子辞を交へて、流動の姿をそへたる、容易く得かたきものなり。これ此集の古代哥として注意すべきの三なり。

景物を謳へるものにては木綿垂の神田を詠める、庭生の辛薺を詠める、古雅愛すべく、前張の衣を染むといへる、飛鳥井の宿りはすべしといへる、清新似るべきものなし。

人事を謳へるものにては(一)朝儀の尊きをいひしもの(二)貴人寵榮のさまをいひしもの(三)世道の泰否をいひしもの(四)人生の浮沈をいひしもの(五)世事を諷諭せしものなど限りなく多し。

新しき年の始にかくしてそ、仕へまつらめ万代までにとも、あなたふと、今日の尊さ、昔もかくやありけんとも謳ひしは、いかに朝儀の嚴肅なりしかを見るに足るべく、しかも溫雅なる氣風のこもれるものなきにあらず。此の殿はうべも富みけり、さき草の三つば四つばに殿作りせりとも、席田のいつぬ

き川に栖むつるの、千歳をかねてぞ遊びあへるとも謳ひしは、いかに、當時公卿の富榮を窮めたりしかを見るべし。さかも、士民のこれに對して怨刺の言なきは、樂しみて淫せざりしものありしなるべし。白壁しづくやおしとんぞと謳へるは、國運の伸長を頌し、新京朱雀のしだり柳、まだい田井となると謳へるは、大都の衰替を歎せしにあらざるか。あるは、いつきいはひしも去るく、時にあへるかもと喜び、あるは、それにとそ繭つくらせて、糸引きなさめと悲しび、あるは、老鼠、若鼠、おん裳つんづ、袈裟つんづといひ、あるは蓋の木の根を掘りて、角をれぬといひて、小人國を過りぬべき、又その姦策の成らざりしなどを物に托してその意を寓せし、世態の底、人情の曲折、くまなく寫し出して、短篇小作の上に躍々たらしむる技量、後世作者の容易く學び得べきものにあらず。率直にして露骨ならず、優婉にして柔弱ならず、雄渾壯大の氣なしとこそいへ、雅麗の姿、和暢の趣、何ものかこれに比敵せん。

詩形に至りては、實に千變萬化を極む。一段二段の短篇あり、五段七段の長篇あり、二段三段にして短きものあり、一段のみにして長きものあり、三字

四字の短句あり、十字十一字の長句あり、句の連續は三字句六連のものあり、五字句五連のものあり、七字以上四連のものあり、珍しきは、七字五句連續して全篇を爲せるものあり。其の間、はれ、あはれ、あはれそこよしや、あいそ、たさまさ、さきんだちや、そよや、なよやらいしなや、さいしなやなどの拍子辞を前後に挿入して、聲調を助く、爲に縱横奔放、文字飛舞の態を備ふ。これ此の集の古代哥として注意すべきの五なり。

句法は枕辞あれど、言ひかけの辞なく、疊句は多く用ひたれど、對句を用ひたるは少し。これ又此集の古代哥として注意すべきの六なり。

疊句法は思想を反復し、聲調を反復し、人心を衝動して發揚激越の功あらしむるものなれば、神樂催馬樂にこの句法を用ひたる甚多し。その二三をあくれば

榊葉にゆふとりしでゝ、誰が世にか、神の御前にいはひそめけんいはひそめけん

なるあり

み山にはみ山には霞ふるらし、外山なる、まさきのかつら色つきにけり

色つきにけり

なるあり、たもしろきは

いで吾駒早くゆきませ、まつち山、わはれまつち山、はれまつち山、まつら

ん人を、行きてはや、あはれゆきてはや見ん

なると

我門にや、我門に、上裳の裾ぬれ、下裳の裾ぬれ、朝なつみ、夕なつみ、朝なつ

み、朝なつみ、夕なつみ、我が名を、知らまくほしからば、御園生の、御園生の、

御園生のや、御園生の、菖蒲の郡の大領のまなむすめといへ、たとむす

めとこそいはめ、

なるとあり、最も多くしてをかしきは

我門をとさんかうさん練る男子、よしこざるらしやよしこざるらしや

よしなしにとさんかうさん練る男子よしこざるらしやよしこざるらし

しや

なると、又

大御酒わかせ、眉刀自女眉とじめ眉とじめ眉とじめ眉とじめや眉とじ

め眉とじめ

なると

總角をわさ田にやりて、そをもふとそをもふとそをもふとそをもふと

そをもふとそをもふと何にもせずして、春日すら春日すら春日すら春

日すら春日すら

なるなどさまく、あり。枕辭と對句とは古文の常用なり、いひ懸詞のなき

は質撲なる古文辞のさまにして、疊句のかく迄多きは謳物なればなるべ

し。

たもふに、紀記の哥、萬葉の哥に、三字の句も、六字の句も、八字九字の句もあ

りて、必しも今の如く五字句と七字句とのみにはあらざりしなり。その後

五字七字に一定せしは、あるが中に、聲調最も恰好なるに由るべけれど、そ

の聲調の世に喜ばれ、且つ一定の姿になり來しは、ひたすら耳にきくを主

とせる哥の目に見るを主とせるよりの事ならざるべきか。神樂催馬樂は奈良朝の末より、平安朝中時の頃に至るまでの風俗歌なり。その時代は已に耳にきく哥よりも、目に見る哥にうつれる時なりしに、獨これのみ長短雜躰の句形を用ひたるはこれ全く謳ひものとし、耳にきくものとして、用ひられたればならむ。これ此の集の古代哥として注意すべきの六なり。

又おもふに、上代の哥は短句を上に、長句を下にわくを常法とするに、神樂催馬樂の詩形に、六字以上の句を唱へ始としたるもの十四首、六字以下三字を以て唱へ終りとしたるもの十五首ありて、長句を上に短句を下にしたるもの世に出てたり。此れより後は、目に見るものならで、耳にきくべきもの、小唄、長哥の流行もの迄、皆この句形に依るは、いかなる理にやあらむ。奈長朝より平安朝に入る疆域、即遷都を中心にして歌句聲調の上にかくの如き變化あるを見るは、歌學上大に研究すべき問題ならずやは。

五七句形は沈重あり、七五句形は輕浮なり。五七七の句形はさらに莊重なり、七五五の句形は更に洒脫なり。遷都以前の國民は必しも敦厚にして、以

後の國民は必しも浮華なりきとは言はず、遷都以前の國民は必しも壯大にして、以後の國民は必しも纖巧なりきとはいはず。されども、先きに漢籍入り、後に佛經渡り、西大陸の文華を引きて、我國の風習を潤飾せしより、國民の態度、遷都の前後同一視すべきにあらざらん、從て、目に映するもの耳に響くもの、一として嗜好の上の變化なしといふ可らず。歌謳の聲調やう〳〵に變化せしもの、亦これの影響にあらざらむや。偖、音樂の事、當時二流ありて、朝家に用ひしは支那渡來のもの、民間に用ひしは天竺傳來のものなり。朝家に用ひしは一の儀式に過きずして、弘く士民の弄びしは天竺傳來のものなりしか如し。そは、白雪耳に遠く、巴調聞くになつかしきのみならず、今こそあれ、昔は梵唄聲明昌にして、人聽を聳かせしこと少小ならざりしに由る。和讃、漢讃、梵讃等の佛敎歌は、予輩未だ深く研究せしことなきも、和讃の如き同しく七五句形を爲すにて見れば、我國遷都以後の詩形、全くこれに化せられたるものならざらんや。まして、神樂催馬樂などの哥は、本これ民間の風俗歌中より撰集せしもの、必ずや、梵唄の句形に由りたるもの

なるべし、これ此の集の古代哥として注意すべきの七なり。

以上、神樂催馬樂名義を論じて、第三にいたれり。第一は、その名の由る所を明らかにし、第二は、その用を述べ、第三はその内容と外形とを論じて、此の集の哥の研究に注意すべきを條擧せり。固より引據不確にして、論旨明晄を闕くは、著者菲才の致すところ、深く自ら愧つ。もし、これを讀まん人ありて、著者の不敏を責めず、その大意を取るところあらんには、著者の幸といふべく、もし又人ありこれに由りて神樂催馬樂のめでたきものなるを知り、歌學研鑽の材にも供し給はんには、さらに著者望外の幸なりといふべし。なほ、異本、注釋もの等、略、あけて以て未だ讀まざる人の便に供す。

第六章　異　本

神樂催馬樂を載せたるものにて古きものは仁智要錄なり。此書は、藤原師長の撰にして、高倉院の治承年中に書きしもの、又、神樂催馬樂笛琴譜といふもの、此れは多近久の書きしものと思しく、後鳥羽院文治二年の奥書あり。共に七百年以上のものなり。此の二書は最も信憑すべく、次に天治年中(崇德院)に奥書を加へたるもの、嘉禎元年(四條院)に奥書を加へたるもの、年代も右の二書と前後し、節付等正しきものなり。これにつきて、後花園帝の文安六年二月源有俊の奥書ある神樂催馬樂略譜二卷あり、又、伶官安倍家に傳へたる神樂歌古譜二卷、樂家錄に見えたる古本東遊催馬樂譜ありといふ。今世に弘布せるものは、元祿二年九月刊の梁塵愚案本なれど、これは誤謬多く缺けたる所そのまゝなり。其の他、加茂翁校正本、村田春海本等種々あれど、後人の考を以て字句を引直したるものなきにあらず。神樂催馬樂はもと謳ひ物なり。音律に明らかなる人ならでは知り難きものあり。古本の正しきに由るをよしとす。

第七章　注釋もの及參考すべきもの

二集の注釋ものにて古きは、一條兼良公の梁塵愚按抄なり。これに次きては、岡部氏の神樂催馬樂考なり。考には詳かなると略なるとありて、本居氏、

安田氏などの頭書あるものあり。熊谷氏の梁塵後抄は良き説なきにあらねど、橘氏の神樂催馬樂入綾、並に高田氏の樂章類語抄最も好きものなり。本居大平氏の神樂歌新釋は亦珍しき物にて、大和叢書にその一部分を載せたれど、全部世に弘布せざるは惜むべし。おのれ、今の本居豐穎先生に請うて一覽するを獲たり。尚催馬樂の新釋も脱稿すべきまゝにて書庫に在りといふ。たのれ此は見ず。吉田某の樂章神樂歌辨解といふものもあれど、殆一顧の價なし。

參考すべきものは古きものにて、躰源抄、樂家錄、新しきものにて伴信友の加具良考、小中村博士の歌舞音樂畧史等あり。尾張の人藤原守中の著せる歌儛品目、これ又よきものなり。明和の頃、村田氏の京都より携へ來れるものと思しき樂解といふもの、著者の名は知られざれど、此も亦よき參考本なるべし。

神樂

庭燎（にはび）

天の岩戸の故事より起れり、古語拾遺に擧庭燎巧作俳優相與歌舞とあり

本末一首

み山には、み山には、霰ふるらし、外山なる、まさきのかつら、色づきにけり、色づきにけり

正木のかつらは木の名なり、鈿女命の鬘にせる木なれば思ひよせたるものならむ、

此の歌、古今集大歌所の歌の中に神遊の歌として載せたり、

阿知女（あちめ）作法

本 阿知女　於（お）〻〻〻

末（すゑ） 於介（おけ）　阿知女　於〻〻〻

いにしへ鈿女命の神樂せし形を、後世、神樂の時、人長のする作法なり、阿知女といひ、於介といふ、唱へ言葉なり、

採物

神樂の時、人長採りて舞ふより此の名あり、賢木以下抄末で八種あるがうちに正しき神樂歌なり、

賢木

本 さかき葉の、香をかぐはしみ、とめくれば、八十氏人ぞ、まとゐせりける、やう氏人ぞ、まとゐせりける

末 神垣の、三室の山の、さかき葉は、神のみ前に、茂りあひにけり、茂りあひにけり

八十氏人は神に事ふる職の人なり

或説

本 榊葉に、木綿とり垂で、誰が世にか、神のみ前に、いはひうめけむ

末 霜やたび、おけどかれせぬ、さかき葉の、立ち榮ゆべき、神のきねかも、神のきねかも

きねは木根にて榊をさしていふ

幣

本 みてぐらは、我がにはあらず、天にます、豐をか姫の、神のみてぐら、神のみてぐら

末 みてぐらに、ならましものを、すべ神の、御手にとられて、なづさはましを、なづさはましを

豐をか姫は豐宇氣毘賣の轉訛なり。すべ神は皇祖の神のことなれど、此は單に神といふまでの事なり。なづさふは馴副ふなり。本末共に神に供ふる幣を稱讃せしなり。

杖

本 此の杖は、いづこの杖ぞ、あめにます、豐をか姫の、みやの杖なり、かみの杖なり

末 あふさかを、今朝こゆくれば、山人の、千歳つけこて、くれし杖なり、くれしつゑなり

或說

本 あし引の、山をさかしみ、ゆふつくる、さか木が枝を、つゑにきりつる、杖にきりつる

末 すめ神の、みやまの杖こ、やま人の、千歳をいのり、きれる御杖ぞ、きれる御杖ぞ

いつれも幣と同しく、神に供ふる物を讃美せしなり

篠

本 此のさゝは、いづこのさゝぞ。とねり等が、こしにさがれる、こもをかのさゝ、こもをかのさゝ

末 さゝ分けば、袖こそやれめ、こね川の、石はふむとも、いざ川原より、いざ川原より

篠は鈿女命の手草に取りしより神事に用ひ始む。とねりは近衛の舍人なるべし、神事に事ふるものなり。末の歌別意あるにあらず、篠に緣あるより謳ひしものならむ

或說

本 さゝの葉に、雪ふりつもる、冬の夜に、豐の遊を、するがたのしさ、するが樂しさ

末 みづがきの、神の御代より、さゝの葉を、たぐさに取りて、遊びけらしも、あそびけらしも、

豐とは稱言なり。みづがきは崇神天皇の宮の號なり。

弓

弓より以下劔鉾などの武器、古くより害を防く具とし、神にも供へたるものなり

本 弓といへば、しなゝきものを、梓弓、まゆみ槻弓、しなこうあるらし、品こそあるらし

末 みちのくの、あたらのま弓、わがひかば、やう〳〵よりこ、忍び〳〵に、しのび〳〵に

本哥は弓の品々あるをいひ、末哥は弓の縁より男女の中らひを謳へるなり。あだらは地名なり。

或說

末 さつを等が、もたせのま弓、おく山に、みかりすらしも、弓のはづ見ゆ、弓のはづ見ゆ

本 よもやまの、守りにたのむ、梓弓、神の寶に、今ぞつるかな、今ぞつるかな

末 あづさ弓、春くるごとに、すめ神の、豐の遊びに、あはんとぞおもふ、あはんとぞおもふ

さつをは幸雄にて獵する夫をいふ

劔

本 ぞろ金の、めぬきの太刀を、さげはきて、ならの都を、練るは誰が子ぞ、ねるは誰が子ぞ

末 いそのかみ、ふるやをここの、太刀もがな、組の緒垂し、でゝ、宮路通はん、みやぢ通はん

白金の目貫の太刀、ふるや男の太刀は此頃人の得ま欲く思ひしものと見にたり。本哥は稱賛したるもの、末哥は得意かほに都大路を行かんと

謳へるもの

或說

本 いはひこし、神は祭りつ、あすよりは、組の緒ゐで
ゝ、遊べ太刀はき、あそべ太刀はき
末 おきつきに、すめ神たちを、いはひこし、心は今ぞ、
樂しかりける、たのしかりける

太刀はきは神事にたづさはる人なるべし。おきつきは奥津城にて、常には墓所をいへれど、此處にては神の靈を收めまつる所といふにて、神の社をさしていへるなり。

鉾

本 此ほこは、いづこの鉾ぞ、あめにます、豐をか姫の、
みやの鉾なり、みやのほこぞ
末 よも山の、人の守りに、するほこを、かみのみまへに、

いはひつるかな、いはひたてたる

本哥例の讃美のうたなり

杓

杓の神事に用ふるは鎭火祭祝詞に、火の神の心荒ぶる時に、此を以て鎭めまつる由見ゆ。其れらよりの事なるべし。

本 おほ原や、せがゐの清水、ひさごもて、鳥はなくとも、
あそびてを酌め、あそびて行かむ
末 ワが門の、板井のしみづ、里遠み、人しくまねば、み
づさびにけり、水草ゐにけり

せがゐは清和井と書けり山城乙訓郡にあり。みづさびとは水澁の浮びたるをいふ

片折

片折をカタオロシと訓む說もあり。歌曲の節の名なり。樂家錄に曰

く間拍子而前張曲也、此曲本名抄歌也、歌替之以名片折也、又諸舉倣于此説

本 おほ原や、せがゐや、せがゐのみづを
末 わが門の、いたゐや、いたゐの名みづ

諸舉

本 せがゐや、せがゐや、せがゐのみづを
末 いたゐや、いたゐや、いたゐの名みづ

葛　細書云有曲名耳無其歌曲

韓神

韓神は大年神の御子神也。此の神の神樂に預り給へる由緣は、江家次第頭書云、園、韓神口傳云件神延曆以前坐此、遷都之時造宮使欲奉遷他所、神託宣云、猶座此所奉護帝王云々仍鎮座宮內省と見ゑたり

本 三嶋木綿、肩に取りかけ、かたにとりかけ、これ韓神

の、からをぎせんや、からをぎ、からをぎせんや
末 やひらでを、手にとりもちて、われ韓神の、からをぎ
せんや、からをぎせんや

からをぎは枯荻なり、清暑堂の御神樂に、人長が枯れたる荻を持つ事あり。それを動詞にして枯荻すとは荻は音のするものあれば、打ち振ふことをいひしなるべし。やひらでは神に供する食物を載す、柏の葉を集て竹串をさし笠の形に作りたるものなり、葉盤とかく

或説

本 わがあれは、みな人知らず、ちゝが方、母が方とも、
神ぞしるらむ、かみぞしるらむ
末 みや人の、名ではさかもる、おほなほみ、いざわが
ともに、神さかもどれ、神さかもどれ

あれとは古言神に仕奉る意にて加茂齋内親王をアレヲトメといへる類なり、さて我が神に事ふる職は父が方とも、母が方とも宮人は知るまじけれど、神はよく知りまさむ、我は父方よりいふも、母方よりいふも、神に事へぬべき職の家なるなりとの義なりと本居大平翁の説。れはなはみは大直日といふに同しく、神を祭りはてゝ百官の集る事をいへり。神さかもとれは神榮歸にて、人々の直會殿に罷ると共に神も本のれましに返らせ給へといふ意なるべく、即奉上神なりと橘守部氏の説なり。本歌末歌共に神事に仕へ了りし時の歌なるべし

大前張　或曰催馬樂曲

大前張七首小前張九首あり、前張の催馬樂なることは通解第一章に委しく辨しれけり、大小の字を加へたるは何の義とも知り難し、橘氏は七首の催馬樂ありしに、又後に九首添へたるより、初を大とし、後を小と號けたるべしと云はれたれど、神樂に取り用ひし順序によりて、大小の字を加ふるもいかゞわらむ熊谷氏は郢曲抄を引きて、風俗の音聲短く節にいやしめる聲あり、其の振りをかへてこれを唱ふとあれば、はやり歌は節のいやしく聞ゆるを聲長く引きのばへ、雅歌にかなへて神樂の中にも謳へるなるべし、詩の雅も全く雅なるを大雅といひ、雅ながらも少し國風の交れるを小雅と定むとか、此の前張も全く雅樂としらべなしたるを大前張とし、少し風俗の趣あるを小前張とせるにはあらじか、大前張には神樂と同しく安知女於〻〻とあるに、小前張には安伊志〻〻〻安伊佐〻〻〻などいへるも、大小と振りのかはれる所なるべしと言れしは良き説なるべし

宮人

本　みや人の、おほよろごろも、ひざとほし、きのよろしもよ、おほよそ衣

末　ひざとほし、きのよろしもよ、おほよそ衣

おほよそ衣は大裝衣なり、きのよろしもは大宮人の衣を着たるさまの

好きなり。膝とはしは衣の丈の長く膝より下までであるなり

難波潟

本 なにはがた、汐みちくれば、あまころも、あまころも
末 あま衣、たみの〻嶋に、たづ鳴きわたる、たつあきわたる

あまころもは雨衣にて蓑にかゝれる枕詞なり。田蓑嶋は津國西成郡に在り

木綿志天

本 ゆふだすし、神のさき田に、いなのほの、いなのほの
末 いなのほの、もろほにだでよ、かれちぼもなく、かれちぼもなく

諸穂

ゆふしでしは木綿垂しにて秋の實りを祈りて田の畔に祭りたる五十串より垂るゝ幣の事なり。神のさき田は神の幸はへ給ふ田なり。かれち

穂は枯れ落ち穂なり

前張

本 さいばりに、ころもはるめん、雨ふれど、雨ふれど
末 雨ふれど、うつろひがたし、深くるめてば、ふかくるめてば

さいばりは折榛なり榛の皮を細くさきて染むるをいふ

階香取

本 だながとり、ゐなのみなとに、あいぞ、いる舟の、かぢよくまかせ、ふね傾くな、ふね傾くな
末 若艸のや、妹ものりたりや、あいぞ、われものりたりや、舟かたふくな、舟かたふくな

階香取は假字にて尾長鳥なり。此鳥群れ居るよりゐなにいひかけたる枕辞なり。猪名の港は津國に在り。あいぞは拍子辞と見たり。かちよく

まかせは櫓を能く取りまかなへとなり

井奈野　イ本三字无

本 ゐながごりや、ゐなのふし原、あいぞ、とびてくる、
鴨が羽音は、おとおもしろき、ゐきが羽おとは
末 ゐながごりや、ゐなのふし原、あいぞ、網さすや、わ
がせの君は、いくらか捕りけむ、いくらかとりけむ

ふし原はふし芝原あり

脇母古　イ本三字无

本 わきもこにや、一夜はだふれ、あいぞ、あやまりにし
より、鳥もとられず、鳥もとられず
末 ゐかりこもや、わがせの君は、あいぞ、五つとり、六
つとり、七つ八つとり、こゝのよ、十をばとり、十を

ばとりけんや

本歌、さきの女の問に答へて男のいへるなり。一夜あひ事して取り過りしより、汝の事のみ心にかゝりて、鳥も捕らずありぬといふなり。末哥それに對してわか爲めに捕り給はぬなどいふ事あるべしや、必捕り給ひしならむと、數をかぞへたるもしろき言葉なり。此は猪名のふし原に網張りて毎夜鴨のかゝるを待居る所へ女のきて逢ひしさまと見ゐたり

小前張

薦枕

本 こもまくら、たかせの淀にや、たが贄人ぞ、鴨つきの
ぼる、あみおろし、さでさしのぼる、あいぞ、たがに
へ人ぞ、しぎつきのぼる、あみおろし、さでさしのぼ
る
末 あめにますや、豐をかひめや、そのにへ人ぞ、鴨つき

のぼる、網おろし、さでさしのぼる、あいぞ、そのに
へ人ぞ、鳴つきのぼる、あみおろし、さでさしのぼる

本方　安伊志〻〻〻

末方　安伊志〻〻〻

こもまくらは頭を高くすといふより高の枕辞となりしなり、高瀬川は河内國茨田郡に在り。贄人は鳥魚などを捕りて供御に備る人をいふ。鳴を捕るには小網して捕るより突きといひ刺すといふなり。あいぞは拍子辞なり、本方末方の下にしるしゝも拍子辞と見たり

閑野

本　ゑづやの小菅、鎌もて刈らば、生ひんや、おひんやこすげ

末　あめなるひばり、よりこやひばり、とみくさ、こみくさもちて

しつやは低き地をいふとみくさ諸説あり、愚按抄に稻をいふとあり。

磯等

本　いそらがさきに、鯛つる海人も、たひつるや、あまの

末　わきもこがためと、たひつる海人も、鯛つるや、あまの

いそらが崎は志摩國答志郡に在り

篠波

本　さゝなみや、ゑがの唐崎や、みゑねつく、をみなのよさゝや、うれもがも、かれもがも、いとこせに、まいとこせにせん

末　あし原田の、いなつき蟹のや、おのれさへ、よめを得ずとてや、さゝげてはおろしや、おろしてはさゝげ

や、かひなげをするや

篠浪唐崎ともに近江志賀郡に在り。みしねつくをみなは御稲舂女なり。よさゝは吉さ〳〵なり。本歌新嘗又は神社などに奉る料に少女のうるはしきに舂しめたるわざありしなるべく、其の少女の幾人かあるを、何れも我妻などにして馴れ親んとなり。葦原田は葦の生ひたる田なり。いなつき蟹は葦原蟹ともいふ、其の蟹の作爲、稲を舂くか如く、足を振舞ふより、哥に取りて興を添へたるなり。扨かひなげは腕擧にて歎く時にするしわざなれば、蟹もわれらが如くよめを得ず、思ふまゝにならずして歎息すとなり

殖槻

本 うゑつきや、田中のもりや、もりやてふ、かさのあさ

ちが原に

末 われをきて、ふたつまとるや、とるなてふ、かさの淺

茅が原に

殖槻、笠の淺茅原は大和國添下郡に在り。われをきては我を置きてのおを畧きたる詞なり。てふは拍子辭といふ説あれど、拍子辭を句の下に置く例なく、又ありうべきにもあらざれば、拍子辭にはあらで通例用ふるトイフの意あるべし。本末の上に意義を考ふるに、我を殖槻田中の杜淺茅原にかきて、汝は二人の妻を取れりとなり

總角

本 あけまきを、わさ田にやりてや、ろをもふと、ろをもふと、そをもふと、ろをもふと、ろをもふと

末 ろをもふと、なにもせずして、春日すら、春日すら、春日すら、春日すら

總角は古へ男子十五六歳或は十七八歳の頃髪を揭けて髻を二つに分ち角の如にせしをいふ。本末の哥總角を早稲田に出しやりて其を思へ

ば、春日の長き日仕事も手につかで空しく暮すとなり

大宮

本 おほみやの、ちいさ小舍人や、てらにや、てらにや、
玉ならば、てらにや、
末 玉ならば、ひるは手にするや、よるはまきねん、てら
にや、よるはまきねん、てらにや、

大宮のちいさ小舍人は少き殿上童をいふなり。てらにやは拍子辭なり。まきねんは纒き寢んとなり

湊田

本 みなと田に、くゞひ八つ居りや、ころちなや、ところち
あや、八つあがら、ころちなや、
末 やつあがら、ものもはずをりや、ころちあや、八つな

がら、ころちなや、ころちあや、

ところちなやは取る藕のなきなり。鶴八つ物も思はず居るを捕るすべなしといふ義にて、奸人などの惡計をたくろみて爲すましがほに居るを憤りし哥なるべしと橘氏いふ

蕎

本 きり〳〵すの、ねたさうれたさや、みそのふに、まゐ
りきて、木の根をほりはんで、おさまさ、角をれぬ、
おさまさ、つのをれぬ
末 ねたさうれたさや、みろのふに、まゐりきて、木のね
をほりはんで、おさまさ、角をれぬ

蕎の木の根を取り食ひて思はずも角を折りたりとは、奸人の志を得ずして罪人になりしなどをいふにもあらむ。おさまさは拍子辭なり

或說

本 おたらがまうどの、ひとへの狩衣、なごりれそ、い
とねたし
末 おごりれう、小雨にうぼぬらせ、よがれする、いと
〳〵ねたし

おだら眞人の來ぬ夜の多きが妬しさにその狩衣取り入れずして小雨に濡せとなり。よがれは來ぬ夜多きなり。

千歳 志加左へ川留聲折説二反或三反之後、本方千歳哥、末方万歳哥如常

しがさへつる聲とあるは千歳と稱する者出できてそれが囀つる聲と見えたり、偖、次の早歌を舞ひしなるべしと熊谷氏の説。

本 せんざい、せんざい、せんざいや、千こせのせんざい
や、本方なほせんざい
末 まんざい、まんざい、まんざいや、よろづよのまんざ

いや、末方なほまんざい

早歌

本末ともに節短く合せたれば早歌とはいひけん、後世のいふ早歌とは異なり

本 やいづれぞも、とうごまり
末 やかのさきこえて

やは言出しの聲なり、以下これに倣ふ。とうごまりは留りなり

本 やみやまのこつぶら
末 やくれ〳〵こつぶら
眞山の小葛、繰れよ〳〵小葛とあり
本 やさきのくひごろんと
末 やいこはたあがうて

本居大平翁の説に曰く、先方の杙に取り付かんと思ふも、最將葛の長うてなり杙とは鎌に觸れて刈らるばかりの細き木の本立なり

本 やあかゞりふむな、尻なる子
末 やわれも目はあり、前なる子

あかゝりは燈にて手足拆裂くなり

本 やとねりこんぞ、尻こんぞ
末 やわれもこんぞ、尻こんぞ

大平氏の説に曰く、こんそはこそにて、とねりこんそは舍人こそなるべし。右近の君こそ、北殿こそ、など、古くいふ詞、そのこそをくそに轉して、おもしろき事いふくそたちかなどいふ詞あり。貫之の童名阿古久曾などもこれ等よりいひけん。僧、舍人こそ尻こそといひ、汝は尻くそありと詈るに、一方は汝こそ尻くそなりと物諍ひたるなるべしといへり。

本 やあちの山、せやま

末 やせやまの、あちのせ

せやまは狹き山なり。あちのせのせも狹山を畧したるなり

本 やこのゑのみかどに、こしおといつ
末 やかみの根の長ければ

陽明門前にて冠の巾子を落せるといふこと、入道せし人の冠つけたるおゝを笑ひたるなるべし

本 やをみな子の才は
末 や霜月しはすの、かいこぼち

熊谷氏のいはく、十一月十二月の頃、雪深くて山に入ることの難きをりしも、火燒くことの專らなるに思ひよりて、間近き垣の柴木を破り來てたく。遠きおもひはかりのなき女子の才の小賢きを誹りたるなり

本 やあふり戸や、ひはりど
末 やひはり戸や、あふりど

あふり戸は腋戸などの風にあふらるゝを云ひ、ひはり戸は戸骨の弱くて風にたわめらるゝをいふ

本 やもすりあげよ、ろゝりあげん
末 やそゝりあげよ、ゆすりあけん

戸の事よりいふなるべし

本 や谷から行かば、岡からもかん
末 や岡からもかば、たにから行かん

もの諍ひのさまなり

本 やこれからゆかば、かれからゆかん
末 やかれからゆかば、これからもかん

これも同し

明星

吉々利々

本 きゝり〻、せんざいいやう、びやくゑゆとう、ちやうせつしんてう、ゑやうぐげや、あかぼしは、みやうゑやうは、くはやこゝなりや、なにしかも、こよひの月の、たゞこゝにますや、たゞこゝに、たゞこゝにますや

吉も利もよきなり吉利〻〻といふべきを、さは謳ひ苦きよりきゝりゝとあるなり。せんざいいやう以下は千歳榮、白衆等、聽說晨朝、清淨偈にて、躰源抄に由れば涅槃經の文なり。祈の言と見えたり。神樂に佛經の語を唱ふるいかがしきことなり。あかぼしも明星も同し曉に見ゆる星なり、明星は既に見ゆるを、此の月は何にとしたる事ならむ、今、尙、こゝに在となり。祭はてたる朝などの歌なるべし。くはやはこれやなり。

末 びやくゑゆんこ、ちやうせつゑんてう、ゑやぐげや、あかぼしは、明星は、くはやこゝありや、何しかも、

こよひの月の、たゞこゝに、たゞこゝにますや、たゞこゝに、たゞこゝにますや

得錢子

本 こくせにこが、ねやなるや、ゑめゆふひばを、たれかたをりし、とくせにこや、たゝらこきひばや、たれたをりし、こくせにこや

末 われころは、見ればや、うれたさに、たをりて來しかや、とくせにこや、たゝらこきひばや、たをりて來しかや、こくせにこや

とくせにこは得選子にて女官の名なり。我親みし得選を誰か取りしといふことを、得選の寢る閨の前なる檜木に擬して、占めといひ、手折といひしなり。たゝらこきは熊谷氏の說に崇りこきにて、其女の事にて煩しき事などゐるをいふべし。これは繁こき賢こきなどのこきなるべしといへり。末の哥はその答と見ゆ

木綿作

本 ふつくる、ゑゑの原にや、あさたづゝね、あさたづね、あさたづゝね、ましもかみぞや、あそべあそゝべ、あそべあそべ、あそべあろべや、

末 あさたづゝね、

万葉緯に曰く、見牛云、木綿を作らんとて信濃の原に麻を尋ねにゆくなり。末方哥は尋ねわひて、ます〳〵好楮を得て、木綿を作りぬれば、神樂をせよや〳〵と謳ふなり。麻を尋ねて神を祭れば汝も神ぞとなり。

晝目歌

本 いかばかり、よきわざしてか、天てるや、ひるめの神

を、ちばしとゞめん、ちばしとゞめん
末いづこにか、こまをつながん、朝日子が、さすや岡部の、玉ざゝの上に、たまざゝのうへに

古今集にひるめの歌あり。拾遺集に末方の神樂歌あり。二首共に神に事ふる意あり。駒は神に奉るものと見なしたり

或説

なにわざを、われはしつゝか

これは上と同しものゝ畧したるものなり

弓立

弓立は湯立の假字なり神事なり

本いせ嶋や、あまのとねらが、たくほのけ、於介〳〵〳〵
末たくほのけ、いうらが崎に、かをりあふ、於介〳〵〳〵

いせ嶋、いそらが崎、共に伊勢の地名、とねは舍人にあらず、里の刀禰なぞ

の刀禰なり、ほのけは火氣なり

本おほきみの、ゆきごるやまの、若櫻、於介〳〵〳〵
末わかさくら、こりに我ゆくや、ふねかぢさを、人かせ、於介〳〵〳〵

櫻の若木にて靱を作りしなり

本すめ神の、けさの神あげに、あふ人は、ちとせの命、のぶとこそきけ、
末そべ神は、よき日まつれば、あすよりは、あけの衣を、けころもにせん

あけの衣は明衣にて、神事に事る人の服なり。けころもは褻の衣にて常服なり。そべ神はすめ神と同し詞なり。

朝倉

本 あさくらや、きゝのまろどのにや、わがをれば、
末 わがをれば、おのりをしつゝや、ゆくは誰が子ぞ、ゆく人や誰

淺倉は地名にて筑紫にありとも四國にありとも説あり。天智天皇太子にて齊明天皇に供奉して木の丸殿に坐しける時の御歌なり

或説

本 あさくらや、おめの湊に、網引きをれば、あまのめざしに、なびきあひにけり、なびきあひにけり

おめの湊未詳、めざしは女兒の額髪のみじかくて目を刺すほどなるをいふ

末 かつらきや、わたる久米路の、繼橋の、こゝろもしらず、いざかへりなん、あさかへりなん、

久米路の橋は役行者鬼神に命して石橋を架せしめしに、一方の峽に至らずして、其間斷絶せり、よりて危き事を取りて、古く歌にもよめりといふ説あり

其駒

うのこまぞや、われに、われに草こふ、くさは取りかはん、くつわ取り、くさはこりかはんや、水はこりかはんや

われに草こふは我に草を乞ふなり

或説

あしぶちのや、もりの、もりの下ある、わかこまあてこ、あしぶちの虎毛の駒

あしぶちは葦毛駁の駒也。其駒に本末を記さず、或はあしぶち本方に

して其駒は末方ならむ、それ故に其駒とうくるなりといへる説あり

竈殿歌

本 とよへつひ、みありびすらし、久方の、天の河原に、
ことのこゑする、ひざのこゑする、ひざのこゑする

竈神を祭る歌なり。竈神を祭ることは天平三年頃より始れり。ひざのこゑは琴笛の拍子をとる人々の膝を打つ聲のするなり。大神宮儀式帳六月直會の哥に打つなる膝は宮もとゞろにといふ詞見ゆ

末 久方の、天の河原に、豐へつひ、みあそびすらしも、
ひざのこゑする、ひざのこゑする

酒殿歌

本 さかごのは、廣しまびろし、みかでしに、我か手あと
りそ、をかはせぬわざ、をか告げなくに

酒殿は神の御酒を造る所なり。みかは、甕なり甕を神とし祭りて大邑刀自小邑刀自と稱せしこと文德實錄三代實錄に見ゆたり。此は酒殿の神を祭りたる哥なり。我手をとるな然はせぬわざなどいふは男女の戯と見ゆたり

末 さかごのは、今朝はなはきろ、とねりめの、もひきす
そひき、けさははきてき、けさにははきゝ

とねりめは舍人女にあらず刀禰女なり身分あさものを稱せしなり。裳引き裾引き掃き清めたりとなり

或説

本 あまのはら、ふりさけ見れば、やへ雲の、雲の中な
る、雲の中とみの、なかとみの、天の小菅を、さき
はらひ、いのりしことは、今日のひのため、あなた
ふとや、我すめ神の、かむろぎのよさ

末にはこりは、かけろと鳴きぬなり、おきよ、おきよ、
我が一夜つま、人もこそ見れ、人もこそ見れ

雲の中なるは中臣といはん序詞なり。中臣の菅を裂きもちて秡の具とし清め祈りしは今日の爲めなるに、今日かく整へりしは何よりの事なりけり、嗚乎尊しや、皇祖神たちの幸はへ給ふことのありかたさよとなり。末方の哥は祭り了りて明方に歸る時の意をとを面白く事に假托していひしなるべし

催馬樂

律

律、又、呂とあるは調子の名なり

我駒

いでわが駒、はやくゆきこせ、まつち山、あはれ、まつち山、はれ、
二段
つち山、待つらむ人を、ゆきてはや、あはれ、ゆきてはや見む

ゆきこせは、萬葉に去欲と書きて、ゆきこそと訓り、即その意なり。はれ、あはれは拍子辞なり

澤田川

さはた河、袖つくばかり、あさけれど、はれ、

二あさけれど、くにの宮人、高はしわたす
三あはれそこよしや、高はしわたす

くには地名、山城相樂郡にあり、聖武天皇恭仁宮を作らしめ給ひしことありて、諸國司よりその用度を徵し造橋に充てられしこと、續日本紀にも見ゆ。此の歌はそれらを諷諭せしものならむ。淺き川なれば橋を渡すまでもなかるべしとの意を、袖つくばかり淺しといひて、すべて造宮の費の巨大なるを誹りしものなり。あはれそこよしやは拍子辞なり

高砂

四たかさこの、さいさこの、たかさこの、
五そのへにたてる、白玉つばき、玉やなき、
六うれもがと、さん、ましもがと、ましもがと、
七ねりをさみをの、みうかけにせん、玉柳、
八なにしかも、さん、なにしかも、あにしかも、

九心もまだいけん、ゆり花の、さゆり花の、
十けさいたる初花に、あはましものを、さゆり花の

高砂は山の惣名なり、さいさごは、さ砂子にて、さは發頭辞、さ百合花のさと同じ。高砂をうちかへしていふなり。玉椿、玉柳、二人の可憐女にたとへしなり。それもがましもがは二人ともになり。ねりをさみをは練緒染緒の轉語にて、衣服に付る紐なり。みそかけは御衣架にて、衣桁のこと、二人の可憐女を我が練緒染緒つけたる衣の衣桁にせまほしとの意にて、二人とも我妻にせんとなり。さるを、何にしにか、餘り心いそきしたるが爲に得べかりしものゝ遂に得かねたりといふ意を、百合花の語によせていひあらはしたるなり。ゆりといふ語に緩の義を取りたるは古歌に尙あり。さきたる花にあふとは宿志を果す義なり。さだいは未しきなり。さんは拍子辞なり

夏引

あつ引の、白糸、七はかりあり、さごろもに、おりて
もきせん、ましめ放れよ、
二 かたくなに、ものいふをみなかな、ましあさぎぬも、
わがめのごとく、たもとよく、きよくかたよく、こく
びやはらかに、ぬひきせめかも

男女の問答を詠したる歌なり。夏引の麻糸、七兩ばかりあり、衣に織なし着させてんに、汝の妻をすてゝ我に代へ給はずやと女のいひしに、愚なることといふ人かな、麻衣は袂よく、肩よく、襟やはらに縫とらるゝものにあらず、そをよく爲しぬべしといふか、無理のことの給ふ人よ、おのれ今もてる妻は麻よりもよき衣をよくぬひて、不足なく常にたのれに着すれば、あだし心はわれになしと男の答へしなり

貫河

ぬき川の、せゞの小菅の、やはらたまくら、やはらか

に、ぬるよはあくて、親さくるつま
二 おやさくるつまは、ましてるはしも、ちかしあらば、
矢矧の市に、沓買にかん、
三 くつかはゞ、せんがいの、ほろしきを買へ、さしはき
て、うはも取りきて、宮路かよはん

貫河の瀬々の小菅は、柔手枕の序なり。たやさくるは親に放れたる意。ましてるはしもは況して麗しもにて殊に可愛といふこと、う音の畧なり。せんがいは線鞋の字音、はそしきは細底なり。これも男女の問答歌なり。始より二段のましてるはしも迄、女の語にて、夫の親の許さぬより思ふ夫とうち解けて寐る夜少く、夫はまたその親より、放れたるが心苦しくいまはいよゝいとはしさのまさるよといふ意なり。ちかしあらばより下三句、男の語にて、我を左迄に思ひ給はゞ、矢矧の市に沓買ひて汝に與へんといふに、三段また女のこれに答へて、買うて下さらば、細底の線鞋

買うて下され、それうち履きて汝の住み給ふ宮地あたり行き通んとなり。矢矧宮地ともに三河國の地名

東屋

あつまやの、まやのあまりの、雨うゝき、我れ立ちぬれぬ、うのとんのごひらかせ
かすがひも、こざしもあらばころ、そのこんのご、われさゝめ、おしひらいていでませ、われや人つま

あつまやは四阿とかく、屋の四角ある家をいふ。まやは眞屋とかき、兩面垂下せる屋の家をいふ。あまりは軒下をいふなり。とんのごは殿の戸なり。此も男女問答の哥にて、屋下に立ち勞れたり、戸開き給へといふに、女の遠慮なく入らせ給へ、われは他人の妻なりや、汝より外、夫もなきにとなり

走井

はしり井の、こがやゝ刈り收めかけ、うれにころ、まゆつくらせて、いとひきなさめ

はしり井は流るゝ井なり。こがやは小萱にて蠶を養ふ爲に刈るなり。小萱にこそ繭をつくらせぬべけれ、我をば常に家に在らせて繭つくることなどばかりせさせおきて、己れは他し妻に通ひありくと怨める哥なり

飛鳥井

あすか井に、あすかゐに、やどりはすべし、おけ、かげもよし、かげもよし、みもひも寒し、みまくさもよし

飛鳥井は東ノ京二條萬里小路に在り。かげは木蔭、みもひは盃よりれてり て水のことをいふ。れけは拍子辭

青柳

高橋文庫印

あをやきを、あをやきを、片糸によりてや、おけや、
鶯の、おけや、
二 うくひすの、ぬふこいふかさは、おけや、梅の花か
さや

青柳は細き枝垂るゝより糸に見なし、梅は五ひらに咲きて中の窪めるより笠に見なし、偖、鶯の枝より枝に飛びありくを縫ふといふ詞あるより、糸して笠を鶯の縫ふと取り合せたるなり

伊勢海

いせの海の、いせのうみの、清きなきさの、汐がひに、なのりそや摘ん、貝や拾はん、玉やひろはん

汐がひは汐の間なり、なのりそは海草なり

庭生

庭におふる、庭に生る、からなつかは、よき菜なり、はれ、みやびこんの、さぐる袋を、おのれかけたり

からなつなは辛薺にて、その實は三角にして袋の如くあれば、宮人のさぐる袋に似たるより、おもしろく詠めるなり

我門爾

わがかどにや、我門に、うはもの裾ぬれ、下裳のすそぬれ、あさなつみ、夕なつみ、朝なつみ
二 あさなつみ、ゆふなつみ、わか名を知らまくほしからば、御園生の、みそのふのふの、
三 みそのふのや、みそのふの、あやめのこほりの、大領の、まなむすめこいへ、おとむすめとこそいはめ

上裳下裳は上着下着と二重に着たるなり。朝菜つみ、夕菜つみまで、我が

名の序なり。あやめの郡は讃岐の阿野郡などをもぢりたるあるべく、大領は郡の長なり

我門守

我門を、ささんかうさん、練るをのこ、よしこざるらしや、よしこざるらしや、

二 よしなしに、ささんかうさん、ねるをのこ、よしこざるらしや、よしこざるらしや、

ささんかうさんは、兎さま、角さまなり。よしこざるらしは、熊谷氏の説に曰く、よしこそあるらしなり、わけのありそうなといはんが如し、萬葉に志太の浦を朝こぐ舟は由なしにこくらめかも由こさるらめとありと、良き説あり

大路

おほ於ぢに、うひてのぼれる、あをやぎが花や、あをやぎがはなや、

二 青柳が、ちあひを見れば、今さかりなりや、今さかりなりや

青柳か花とは有絮柳なり。古へ京の大路に柳を多く殖られたること物に見ゆ、絮ある柳も交りたるべし

大芹

おほぜりは、くにのさたもの、こぜりころ、ゆでゝもうまし、これやこんの、せんだん、さんたのきの、ゆしのきのばん、むしかめのごう、さいかくのさい、ひやうさいとさい、りやうめん、かすめうけたる、きりこほし、かあはめばんぎ、五六がへしの、一二のさいや、四三のさいや

此哥、何とも心得がたき節多し。諸説も確かならず。其の中、橘氏の説、尤も取るに足れり。今專らその説に從ふ。芹に二種あり、葉の大なるを大芹といひ、葉の細かなるを小芹といふ。それを博奕に比して、樗蒲を大羅といひ、雙六を小羅といひなせるなり。せりといふは博奕に用ふる詞なり。國のさたものは國の御定にて、博奕を制せらるゝこと、持統紀にも文武紀にも後々のものにも見えたり。こせりこそゆでゝもうましとは、博奕は國の大禁なれば思ひ絶たれど、猶双六ぐらゐの小羅は少々警め折檻せられても昧忘れ難しといふ意なり。これやこのは、かなはめのばんぎに懸る詞なり。せんだんさんたの木は、栴檀珊瑚の木を哥の音振によりて轉じたるにもあらむ。ゆしのきは柞の木なり、此らの木して盤を作れるなり。むしかめのどうは牟些食の筒なるべし、牟些とは双六の術語、牟些にはめて勝つの意なり。さいかくのさいは、犀角の賽なり。ひやうさいは平賽なり、とさいは投賽なり、凡て双六の名なり。りやうめんかすめうけたるとは、灰かに浮紋を着けたるをいひて、それを公より薄々名ざし

に預りたるよしに相兼ねたるなるべし。さりとはしとは、兩面に切らざる盤もあらざるに、かくいふは双六の禁制を犯すは、上下一同通しての事なりといふ下心を比したる詞なり。かなはめばんぎは、四方の角々に金具を打ちはめたるをいふ、それを、此は、我等が徒も、つひに此盤木にかねをはめ入たる如く、身に鉗をや着けられなんと比へたるなり。偖、以上は、嚴しき禁斷にその徒どもくやしがりて、飽かぬあまりに、目前にある盤木賽どもを數へあげて、名さしにあひ居る身なれといひ、更に金はめ盤木に言ひ落して、遂に我等も刑に處せられんとの意をあらはしたるなり。五六がへしの一二のさいや四三のさいやとは、いかになりぬとも、好むわざは止め難し、まゝよと賽を投げ出したるを詞にして、かくは歌ひけるなり

淺水

あさんづの橋の、　こゞろこ、　ふりし雨の、　ふりにし

われを、たれぞこんの、なかびと立てゝ、みもとのかたち、せうろこし、とぶらひにくるや、さきんたちや

淺水のはしは、越前國丹生郡にあり。ふりにし雨のまで、ふりにし我の序なり。此は年ふけたる我を、媒人して前方の容子をいひ、妻に來よと、申入らるゝよとなり。さきんたちは君達の意にて拍子辞なり

挿櫛

さしくしは、こうまり七つ、ありしかど、たけくのおようの、あしたにとり、ようさりこり、こりしかば、さしくしもなしや、さきんだちや

たけくは武生（たけふ）の訛語なるへし、武生のじようは越前の國の掾なるへし。ある女の朝夕掾に馴れて櫛を取られたりとなり

鷹子

たかの子は、まろにたうばらんや、手にするゐて、あはづの原の、みくるすの、めぐりの鶉、取らせんや、さきんだちや、

粟津の原は近江滋賀郡に在り、みくるすは御粟栖なり、古へ、此邊に御苑ありて、粟を生し立てしなり

逢路

あふみちの、おのゝをふゞきはや、ひかず、こもりましやせぬらむ、おのゝをふゞきや、さきんだちや

しのゝをふゞきは篠の小吹雪なり。ひかずは吹かずもがなにて吹雪せずもあらば、我思ふ人の家に籠ることなく通ひ來まさむにとなり。近江の女のよめる歌なり

道口

みちのくち、たけふのこふに、これはありと、おや
にはまうしたべ、心あひの風や、さきんだちや

たけふのくふは越前國丹生郡武生の國府なり。心あひの風は心やすの風といはんが如し

更衣

ころもがへせんや、さきんだちや、わがきぬは、の
はらしのはら、萩の衣ずりや、さきんたちや

これは夏冬にする更衣にあらず、人と我れと衣をかへて着んとなり。偖、我衣はたもふ人にあくかれて、野原、篠原、行き通ふ路に萩の花にすれてその花すりの衣なりとなり

何爲

いかにせん、せんや、をしのかもこり、いでゝ行け
ば、おやはありくこ、さいなめご、よつま定めつや、
さきんだちや

をしのかもとりの如く出てありくわれを、親はやかましくいへと、何にせんや、われ已に夜妻定めつとなり

鶏鳴

こりはなきぬてふ、けさくらまぎれ、下紐の緒に、
おしすがりゐてころ、こゞこほれ、おく子なすまで

鶏鳴きて旅に出立つわれを、衣の下紐の緒に取りつきて、妻などの子供みるやうに泣きぬとなり

老鼠

西寺の、老ねすみ、若ねすみ、御裳つんづ、袈裟摘

んづ、けさ摘んづ、法師に申さん、師に申せ、はうしに申さん、ゐに申せ

西大寺の老鼠若鼠心を合せて御裳袈裟を啄みつ。早く上様に申出よとなり。父子心を合せて姦策なせしものゝあるを諷諭せるものと見ゐたり

隱名

くぼの名をば、何にとかいふ、くぼの名をば、何にとかいふ、つびたり、けふくなう、たもろ、ひのなかの、ひつきめゐ、けふくゐう、たもろ

此歌古くより心得かたき歌としたり。今、橘氏の說を試にあぐ。

くぼはくぼまりたる所。女陰をいふ。つびは屎にて女陰の名なり。けふくなうは毛ふくれ囊にて、男陰をいふ。たもろは賜れといふことの約れるにやあらん。ひつきめなは屎つくめんの上畧なり。一首の意は女陰の名を何といふか。その本名は屎たり。されば、毛陰囊を賜れかし、屎の中におしあてゝ閉めんとなり。委しくは入綾を見るへし

呂

安名尊

あなたふと、あなたふと、今日の尊さ、いにしへも、はれ、

一 いにしへも、かくやありけんや、けふのたふとさ

三 あはれそこよしや、けふのたふとさ

たふとさはめでたくよきを賞する詞なり。右へもかくやありけんとは事を重〻しくしたるなり

新年

あたらしき、あたらしき、としの始めにや、かくし

こそ、はれ、
二 かくしこそ、つかへまつらめや、よろづ世までに、
三 あはれそこよしや、よろづ世までに
御代永く仕へまつらんとて、御代を壽きたるなり

梅枝

むめが枝に、來ゐる鶯や、春かけて、はれ、
二 春かけて、鳴けどもいまだや、雪はふりつゝ、
三 あはれそこよしや、せきはふりつゝ
此哥、古今集にあり。春かけては春かけて雪はふりつゝと句を隔てゝ義を取るべし

櫻人

さくら人、さくら人、そのふねちゞめ、島津田を、十町

つくれる、見てかへり來んや、そよや、あすかへり來
んや、そよや
二 ことをこそ、あすともいはめ、をち方に、つまさる
せなれば、あすもさねこじや、そよや、をあすもさ
ねこじや、そよや

さくら人は花人などいふが如く、麗しき人をいふといふ說あれど、地名より言ひつけたる詞とする方よけん。作良は尾張國愛智郡にあり。その舟ちゞめは、その舟止まれなり。そよやは例の拍子辭なり。ことをこそは、言をこそにて、口にはさいいふもののなり。をち方に妻さるせなは遠方に妻を避る夫なればなり。偖、一段にて舟を止めよ、われそれに乘りて、十町に作れる嶋の田を見に行かんといふに、口にはさいはるれど、本われをよそにして、外にかくし妻ありて行かるゝことあれば、明日は愚か、去あすも歸り來ますまじと女の言ひしなり。さねこじのさねは實になり

葦垣

葦垣、　まかき掻き分けて、ふみこすこ、おひこすこ、
はれ
ふみこすこたれか、誰か、此の事を、おやに、まう
よこしまうしゝ、
とゞろける、このいへ、此家の、おとよめ、おやに、
まうよこしけらしも、
天地の、神も、かみも、そうしたべ、われは、まう
よこしまうさず
すがの根の、すがな、すがおきこを、われはきく、
われはきくかな

一段より三段までの大意、葦垣、籬、ふみ分けて、その家の女を負ひて越

すと、誰か、その親に申し讒せし、弟婦の讒せしならむとなり。とゞろける
この家とは所に名の轟ける大家なるあり
四段より五段までの大意、天地の神も證し給へ、われは決して讒せし
となし、われはすがなき言を聞くものかなとなり。すがなきはすげない
といふ俗言とおなじ

山城

山しろの、こまのわたりの、瓜つくり、なよやらい
しなや、さいしなや。
瓜つくり、われをほしといふ、いかにせん、なよや
らいしなや、さいしなや、いかにせん、はれ、
いかにせん、ありやおぬらし、うりたつまでに、や
らいしなや、さいしなや、うりたつま、瓜たつまで

に

山城狛郷は昔熟瓜を出したる名所なり。なよやらいしなや、さいしなやは例の拍子辭なり。うりたつまでは瓜の熟するまでになり。此の哥小女の瓜作りより所望せられて心を惱ますさまを小女になりてよめるなり。瓜作より度々申しこまるゝを、如何にせん〳〵、此の申込の、或は瓜の熟せん頃までに成りもせんか、いやな事よとなり。成りもしぬらしは瓜の縁語を以ていふ

眞金吹

まがねふく、まがねふく、吉備の中山、帶にせる、なよやらいしなや、さいしなや、帶にせる、はれ、
二おびにせる、細谷川の、おとのさやけさや、やらいしなや、さいしなや、音のさや、音のさやけさや、

此の哥古今集承和の御贊の吉備國の哥也とあり。まがねは金といふ說

と鐵といふ說とあり、いつれにてもあるべし。吉備中山は備前備中の國境にあり。細谷川は備中の國なり。音のさやはさやけさといふべきを音振(ねぶり)によりて下畧したるなり。此の類猶多し

紀伊國

きのくにの、紀のくにのや、ちらゝの濱に、眞ちらゝの濱に、おりゐるかもめ、はれ、うの玉もてこ、
二かぜしも吹いたれば、名殘しも立てれば、水底(みなそこ)きりて、はれ、その玉見えず

白良の濱は紀伊國牟婁郡にあり、ま白らの濱のまは發頭語なり。おりゐるかもめは下居鷗なり。名殘しも立てればとは海の荒れたるあとに立つ波をいふ。水底きりては水底くもりてなり。此の歌次の葛城などゝ同しく當時の童謠と見えたり。何事かの兆をさとしたるものなるべし

葛城

かつらきの、寺の前なるや、豐浦の寺の、西なるや、
榎の葉井に、白壁ゐづくや、ましら玉ゐづくや、お
しとんど、おしとんど
ゐかしてば、國ぞさかえむや、わいへらぞ、富みせ
んや、おしとんど、こしとんど、おしとんど、こし
とんど

此哥、續日本紀光仁天皇紀に見ゑたると殆同し。榎葉井は葛城寺と豐浦寺とのあたりにありと見えたり。白玉しづくは白玉の井底に沈めるなり。光仁天皇の未た世に出でまさゞりしに擬へいふなり。偖、この玉の世に出でもせしならば、國も隆ゑ、吾等か家も富みて裕かになりなんとの童謠なるなり

竹河

たけかはの、橋の詰なるや、はしのつめなるや、花

園に、はれ、
花ぞのに、われをば放てや、われをば放てや、めざしたくへて

伊勢國多氣郡に齋宮ありて、そのあたりに、笛川、竹川といふ川も花園村もあり。齋宮を慰めまつらん爲めに、花園を造りしより村名も起りしものなるべし。齋宮は男禁斷にて、女のみ奉事せることなれば、此の歌あるなり。我を花麗なる花園に童女を具せしめて遊はせよとなり

河口

かはぐちの、せきのあらがきや、せきの荒垣や、守
れども、はれ、
まもれども、出でゝわれねぬや、出でゝ我ねぬや、關
のあらがき

六帖に、川口の關の荒垣守れども、出でゝわがねぬ、しのび〳〵にとあり。河口の關は伊勢國壹志郡に在り。出てゝ吾ねぬは、家を恐び出てゝ思ふ人と寐たるなり

此殿者

この殿は、むべもとみけり、ささくさの、あはれ、ささくさの、はれ、

ささくさの、三つ葉四つ葉の中に、との作りせりや、殿つくりせりや

ささくさは三つ葉の枕辞、三つ葉四つ葉は三棟四棟なり

此殿西

このとのゝ、此の殿の、にしの、にしの倉垣、春日すら、あはれ、春日すら、はれ、

春日すら、もけど、もけごもつきず、西のくら垣や、西のくら垣や

春の日の永きに行きめくるも、此殿の西の倉垣は行き盡きずとなり。倉庫の多く立並びたるをうたひしなり

此殿奥

此の殿の、このとのゝ、おくの、おくの酒屋の、うばたまり、あはれ、うばたまり、はれ、

うばたまり、われを、われを戀ふらし、こざかごゆなるや、こざかごもなるや

さか屋は酒を釀す屋なり。うばたまりは姥專女（うばたうめ）といふべきを酒の上澄（うはたまり）に語を移しゝなり。專女とは老女の稱なり。こさかは濃酒なるべく、こゆは濃くなるなるべし。われを思ふことの濃き意なり

鷹山

たか山に、たかを放ちあげて、をぐよしをなみ、あはれ、をくをなみ、はれ
をくをなみ、わがす、わがする時に、あへるせなかもや、あへるせなかも

狩する山に鷹を放ち上げて、招くすべもなく思ひ困うじ居たるに、我が夫の來てうれしとなり。をぐは招くなり

美作

みまさかや、くめの、くめのさら山、さらくに、なよや、さらくに、なよや、
さらくに、わがあ、わが名はたゐじ、萬代までにや、よろづ代までや、

美作國久米南郡に久米郷あり。其地にある山なり。更にといはん序に、久米のさら山をもち出でたり。此歌、古今集に出で、水尾帝のれはんべの歌とあり。れはんべとは大嘗の音便なり。その時に用ゐし風俗歌と見えたり

藤生野

ふぢふのゝ、かたち、かたちが原に、ゑめはやし、なよや、ゑめはやし、なよや、
ゑめはやし、いつきいはひしもゑるく、時にあへるかも、時にあへるかもや、

藤生野は山城國相樂郡にあり。橘氏の説に曰く、しめはやしは童女の程より行々かくせんと領しおくにて、はやしは取はやし、いひはやしなどいふと同しく、榮す意なり。偖、此の哥は、藤原氏を藤生野に比し、その姫君の顔貌の優れ給へるを形か原にいひなし、豫てより内裡に奉らんと申

しはやしたき、大事に育てし甲斐ありて、今其時にあへりと喜べるなり

妹與我

いもこわれ、妹こわれと、いるさの山の、山あらゝき、手なふれそや、香をかをすがにや、香をかをすがにや

妹とわれと共に入る山の山蘭に、手を觸る勿れ、われらが袖に香をかをらすが爲めのものなりとの意

淺緑

あさみどりや、こいはなだ、そめかけたりこ、見るまでに、玉ひかる、下ひかる、ゑんきやう、すさかの垂(した)りやなき、まだい田井こなる、せんざい、秋萩、なでしこ、からほひ、ゑだり柳

こいはなだは濃き花田なり。玉ひかる下ひかるは柳をいひて京を賞めたるなり。しんきやうすさかは新京朱雀にて、平安新都朱雀大路なり。まだい田井となるとは此地京になりて未だ幾許も歴ず、未だしきに荒れて舊の田舍となりぬべしとなり。前栽以下、草木の名をあげて、惜しむ意をあらはせり。此れや、新京の衰兆を謳へるものなるべき

青馬

あをのま、放(はな)れば取り繋げ、さをのま、放れば取りつなげ、ゑのいさやの、ゑのいさやの、さをこがひこゑる、さいろんこ、またいたんこの、たいきのわらはの、さをこがひこなる、さいろんこ

あをのまは青毛の馬なり、さをのまも同しもの。しのいさやは凌き羽の矢といふことなり。矢に剡く羽を凌き羽といふは風を凌きて飛ふ故なり。さを子は人の名、それが曾孫なるさいろん子とは、さ郎子(イロコ)にて親しみ

いふ辭なり。またいたんこのたいきのわらは丶眞大膽子の大氣の童子なり。大膽不敵の男兒といふ意、それに馬を取つなげと課するなり

妹之門

いもが門や、せなが門、行きすきかねてや、わがゐかば、ひぢかさの、ひぢかさの、雨もやふらなん、ゑでたをさ、あまやどり、やどりてまからん、ゑで田長

此の哥は、萬葉に妹が門ゆき過きかねつ、久方の雨もふらぬか、そを由にせんとあるより謳ひしなり。せなが門は妹か門といひし詞の拍子に乘りていへるなり、只、妹か門なり。ひちかさは俄にふる雨の笠も取りあへずして、袖をかつく雨なり。しでたをさは郭公の名なり、鳥に問ひかけたる詞なり

席田

むしろ田のや、むしろ田の、いつぬき川にや、すむつるの、いつぬき川にや、すむつるの、すむつるのや、すむつるの、千歳をかねてぞ、あそびあへる、よろづ世かねてぞ、あそびあへる

席田もいつぬき川も美濃國の地名なり。文治節付本に、元慶元年、大嘗會悠紀、美濃國風俗也とあり。いはひの哥なり。

大宮

おほみやの、西のこんぢに、あやめこんだり、さやめこんたり、たり、やり、たんな

大宮の西の小路に菖蒲の込みたりといふは五月の節に用ひしものなるにもあるべし。さやめはさあやめなり。たりやりたんなは例の拍子辭なり

總角

あげまきや、たう〳〵、ひろばかりや、たう〳〵、さかりて寢たれども、まろびあひにけり、たう〳〵、かよりあひにけり、たう〳〵

總角と一尋ばかりも離れて寐たれど、何時の間にか、轉び合ひたりとなり。かよりのかは發頭辭、たう〳〵は例の拍子辭なり

本滋

もとゐげき、もと滋き、吉備の中山、むかしより、むかしから

むかしから、むかしより、名のふりこぬは、今の世のため、今日の日のため

もと滋きは樹の繁れるなり。名のふりこぬとは、人に飽かれず、賞美せら

るゝなり。此れもいはひの歌なり

美濃山

みの山に、しんじにおひたる、玉かしは、とよのあかりに、あふが樂しさや、あふが樂しさや

美濃の山に繁く生ひたる玉柏の、豊明にあひたるとは、言を玉柏にかりて、己がうれしさをいひたるなり。玉柏は大嘗會に用ふる具なり

眉止之女

大御酒わかせや、まゆとじめ、まゆとじめ、眉とじめ、眉とじめや、まゆとじめ、眉とじめ

大みきわかせやは御酒を煖かせなり。とじは戸主にて女の稱なり、眉といへるは、眉ぬきかねつけたる中古の風習なるに、眉を拔かずしてありし女なればいふ

酒飲（さけをたうべ）

さけをたうべて、たべゐうて、たふとこりんぞや、まうでくる、なよろぼひそ、まうでくる、たんあ、たんあ、たりや、らんな、たり、らり、ら

酒に醉うて倒れて懲りんぞやとなり。まうでくる罷出くるなり。たんな以下皆例の拍子辞なり

田中井戸

田中のゐどに、ひかれるたなぎ、つめ〳〵あこめ、田中のこあこめ、たらり、らり、田中のこあこめ

たなぎは水葵といふもの、食ふべし。光れるとは花などの奇麗に見ゆるよりいふ。あこめは吾子女、親しみいふなり。たらりらりは例の拍子辞

無力蝦

ちからゐきかへる、ちからなきかへる、骨なきみゝず、骨なきみゝず

嘲弄の意をうたへる歌なり

難波海

なんばのうみ、なんばの海、こきもてのぼる、小舟大舟、つくしづまでに、いますこしのぼれ、山崎までに

つくしづ地名淀川より難波に下る間にありといふ

鈴之川（すゞかは）

すゞか川、すゞか川、やそせのたきを、みな人の、めぐるもゐるくや、時にあへる、時にあへるかもや

鈴鹿川は伊勢國鈴鹿郡にあり。やそせのたきは八十瀬の湍なり。人世行

路の嶮なるによそへていふ。偖人の世は八十瀬と辛き瀬の多きに、つひにその瀬をこゝにわたりて、素志の果せる時にあへりとなり。めくるもしるくやの下、難儀多しとの意をそへて見るべし

石川

いしかはんの、こまうどに、おびをとられて、辛き悔いする、

いかんなる、いかんなる帶ぞ、はなだの帶の、なかは絶にたる

かやるかやるか、なかは絶にたる

石川は河内國石川郡にて、高麗人をおかれしことあり。花田の帶の中は絶にたるといへば、その高麗人と心にもあらで解きかはしつるにつけて、思ふ夫の中の絶にたるを悔るなるべしと岡部氏の說なり。かやるかやるかは返へす〳〵にて中絶に果てしを深く悔いしなるべしと此も

岡部氏の說

奥山

おく山に、木きるやをぢ、木をやけんづる、まきやはけんつる、木けんづる

奥々山

おく山に、木なかすと、木きるをぢ、きやときやと、木をやはけんづる、ま木やはけんづる、木けんづる

きやきやは木よゝゝにて木を覓ひる詞なり、右二首共に何ぞ當時意味のありし歌なるべし。今知りがたし

我家

わいへんは、とばり帳をも、たれたるを、大君來ませ、むこにせん、みさかなに、何によけん、あはび

さだにか、かせよけん、あはびさだにか、かせよけん

わいへんは我家なり、我家には帷も帳も垂れたり。大君來ませ婿にせんとなり。御肴には鰒榮螺（あはびさゞい）かはた甲羸（かぜ）なゞ設けて取もたんといふ。さだにはさゞにの訛言なり

神樂催馬樂通解 終

昭和學園 短大 第 7914 号 受入 昭37.6.5

明治三十三年九月廿二日印刷
明治三十三年九月廿五日發行

定價金三拾錢

著作者 東京市本郷區駒込淺嘉町九十九番地 今井彦三郎
發行者 東京市神田區駿河臺袋町一番地 田中眞弓
印刷者 東京市神田區仲猿樂町四番地 藤澤外吉
發行所 東京市神田區駿河臺袋町一番地 古今文學會

賣捌所
東京市神田區錦町 明治書院
同 表神保町 東京堂
同 裏神保町 上田屋支店
同 京橋區南傳馬町 吉川半七
同 鎗屋町 東海信文合資會社
同 町 北隆館合資會社

印刷所 東京市神田區仲猿樂町四番地 日本印刷株式會社

不許複製

高田馬場 文學堂 第 2145.